

令和 2 年 6 月 1 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02418

研究課題名(和文) 義堂周信『空華集』における観念的世界 典故表現の全貌解明を目指して

研究課題名(英文) About the ideological world in the Kugeshu of Gido Shushin-For elucidating the expression that there is authority

研究代表者

太田 亨(OTA, TORU)

愛媛大学・教育学部・准教授

研究者番号：80370021

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：義堂周信(1325～1388)の詩文集『空華集』について、その作品を訳注すると共に、作品中の表現が中国のどのような書物を典拠としているかを追究した。訳注することによって、これまで義堂は一般的詩文を詠むようになった禅僧と考えられていたが、偈頌的要素を多分に含んでいることが判明した。また義堂が杜甫の詩を典拠として、どのように作品を詠んでいるかを精査し、更に後世にどのような影響を与えたかについて解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『空華集』における典故表現を精査し、その中で特に杜詩に着目した。結果、義堂が、状況に応じて杜甫の詩句を用い、観念的世界を構築していることが分かった。さらに、それらの観念的世界は後世の禅僧の詩文にも継承されていることから、義堂が禅林の文芸における規範となっていたことを証した。また『空華集』の訳注においては、これまで本格的な訳注がなされていなかったが、中国文学の訳注法と日本文学の訳注法を兼ね合わせて、従来とは異なる訳注を行った。この訳注はこれから継続していく。

研究成果の概要(英文)：About Gido Shushin's poetry collection of works "Kugeshu", translation with notes did the work and investigated it what kind of Chinese book expression in a work was doing with authority. By doing translation with notes, Gido was regarded as the Zen priest who came to write a general poetry sentence, but it became clear until now to include a lot of elements of the Buddhism. In addition, I investigated the work which Gido composed on poetry of Du Fu as authority thoroughly, furthermore, elucidated it what kind of influence his poetry had in history.

研究分野：日本漢文学(中世禅林の文学)

キーワード：義堂周信 空華集 観念的世界 典故表現 杜詩

1. 研究開始当初の背景

現在、禅林の文学研究は各方面から積極的な調査・研究が進められているが、禅僧個人の人となり及びその文学を究明した論考は殆ど見られない。それは、傑出した一人の文筆僧の作品について、禅林で創出された作品の特異性を理解した上で、それに相応しい方法で丹念に読解することが成されていないことに原因があると考えられる。

禅僧の作品には、法語や公的文書等、様々な表現形式がある上、師承関係、武家や貴族との繋がり、寺院間の交流、禅僧間の交遊関係といった具体的事象を多分に含んでいる。また、直観で得た感覚を問答や比喩を多用して表現したり、中国の外集・内典を典拠に用いて観念的世界を表現したり、一般詩文とは異なる特異性が見られる。これらのことが禅僧個人の人となり及びその文学を究明する障壁となっているのである。

これまで義堂周信を対象として、寺田透氏が『義堂周信・絶海中津』(日本詩人選 24、筑摩書房、1977)、蔭木英雄氏が『義堂周信』(日本詩人選集、研文出版、1999)を撰し、義堂の人と文学の概要を述べている。また蔭木氏は義堂の日記『空華日用工夫略集』に訓注を施している。これらの他、義堂が宗旨と文学をどのように考えていたのかを論じた論考や、義堂の著作『空華集』『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』を書誌学的に論究したものが見られる。先人の手によって各方面から義堂の基礎的事項が明らかにされつつあると言える。しかし、先人の何れの論考においても、義堂が禅林の文学者の代表と認める一方で、宗旨を重視して外集習得を誡める気風を軟化させた人物として評価されている。つまり義堂が一般詩文作製を認める文学観を有していたとするのである。

2. 研究の目的

研究代表者は、義堂周信(1325-1388)の詩文集『空華集』所収の全作品を読解・訳注し、その生涯と文学営為について解明するという全体構想を抱いており、それに向けて以下の3項目を達成する目的で本研究に取り組む。

- 、義堂周信が『空華集』所収の作品の中で、中国の禅籍・経史子集の故事を用いて、どのような観念的世界を構築しているのか、その全貌を解明する。
- 、義堂の著した語録・日記・偈頌選集を調査・整理し、禅籍・経史子集についての言及箇所を抽出し、典故表現の全貌解明の際に参照する。
- 、『空華集』所収の作品を読解・訳注し、随時訳注稿を公表する。

を達成するために、 を行うことが必要であり、 は本研究期間以後も継続して行う。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するために、 ~ について、下記のように研究を行った。

については、五山版『空華集』を底本とし、それぞれの作品における故事を考査していく。典故については、禅籍・経史子集に分類し、何れの書物からの典拠が多いのか検討した。また故事から禅林独自の特異な観念的世界を構築している場合は、後世への継承をも調査した。具体的には義堂が杜甫の詩を自身の詩文にどのように典拠として用いたのか、さらに義堂が詠出した杜甫に関する事項を後世の禅僧がどのように利用したのかを考証し、論として纏めた。また茶に関する表現についても、義堂が禅林においてどのような役割を果たしているかについて考察した。

この一連の過程で、書写本『空華集』と元禄版『空華集』を用いて対校した。研究分担者・朝倉尚氏は、元禄版『空華集』と五山版『空華集』を対校を行ったことがあるため、本調査に大いに助言を得ることができた。

については、義堂が禅籍や経史子集をいかに利用していたかを明らかにするためには、義堂の『空華集』以外の著作品を考究する必要がある。義堂は、偈頌選集『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』・日記『空華日用工夫略集』・語録『義堂和尚語録』を製しており、それらの中に、禅籍や経史子集に対する考え方が色濃く表れている。これらの諸本を絶えず参照するために、まず義堂の著書についてはテキスト化し、禅籍や経史子集の言及箇所を抽出することができるようにした。直接に論に結びつくわけではないが、 の作業を行うことによって、 の目的を遂行することができる。

については、『空華集』の作品一つ一つを深く読解し、訳注稿を公表した。訳注する際には、まず作詩背景について、 で挙げた義堂の著書の他に、同時代の禅僧の詩文集を精査した。作品中の語句の典拠については、禅籍と外集の両面に関する書物を精査した。さらに、中国文学の訳注法と日本文学の訳注法を兼ね合わせて読解・訳注を施していくため、なるべく中世禅林で行われた語句の解釈・考え方を以て『空華集』の作品を読解することを心がけた。

以上のようにして、『空華集』所収作品における典故表現について精査し、義堂が詩文を製するに当たり、何れの禅籍・経史子集を重んじていたのか、いかにして中国の文人の詩句や故事・逸話を禅の宗旨（境地）に結びつけ、観念的世界を構築していたのか、作詩手法上どのような特徴があったのか等を考証した。

4. 研究成果

・ ・ の目的に応じて以下に研究成果を述べる。

目的 の典故表現の追究については、『空華集』における茶に関する典故表現に着目し、その傾向を調査した。義堂が盧仝の「走筆謝孟諫議寄新茶」詩・陸羽の『茶経』を意識した典故表現を頻用しており、表現の目的に応じて、典故の傾向があることが窺えた。ただし、禅林においては既にそれらの表現法は定着しており、義堂はそれらを継承したといえよう。その成果は「日本中世禅林文学における茶に関わる典故表現について」として『白居易研究年報』18号(2017)で公表した。

また、義堂が自身の詩文に杜甫に関する事項を詠出する場合、杜詩句や故事をどのように典故として用い、観念的世界を表現しえたかを整理し、かつ後世にどのように影響を与えたかについて論じた。義堂は、杜甫の詩句を用いて当時の外集嗜好を戒め、杜甫に関する画図に賛を付したり、杜甫の忠義・困窮・情といった面に着目し、それぞれの場面で杜詩句や故事を典故に用いて表現した。それらの典故表現は後世の禅僧の詩文に頻繁に見られることから、当時の規範となっていたことが分かった。その成果は「日本中世禅林における杜詩受容 義堂周信・絶海中津が果たした役割を中心に」として『佐藤利行教授還暦記念日中比較文化論集』（白帝社・2019）で公表した。この論考に先んじて、禅林中期（南北朝時代末期～応仁の乱頃）において、禅僧が詩の優劣を詩人と自然の係に求めていることについて、義堂が、心が清浄な有徳の人物が自然（江山）に接することで、その恩恵を受けて立派な詩を詠出できると考え、それを杜詩に結びつけたことが発端となっていることを論じた。それは「日本中世禅林における杜詩受容

杜甫と自然の係に着目して（中期の場合）」（『愛媛大学教育学部紀要』64巻・2017）で公表した。また、義堂が字号や軒名を付ける際や、当意即妙で詩を詠じる際など、様々な状況で杜詩を利用していることについて、「日本中世禅林における杜詩受容 杜詩の援用について（中期の場合）」（『愛媛大学教育学部紀要』65巻・2018）で論じた。

目的 の義堂の『空華集』以外の著作品を考究することについては、偈頌選集『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』・日記『空華日用工夫略集』・語録『義堂和尚語録』をテキスト化し、日記『空華日用工夫略集』に出てくる内典・外集作品を抽出した。その様相については、応永・永享期文化論研究会で題目「日本中世禅林における中国文学受容について 応永年間を中心に」として発表した。その過程で、義堂が『雪峯空和尚外集』を注釈し、抄物を残していることが判明した。また義堂は『三体詩』の抄物も著しており、現存しないものの、他の禅僧の抄物の中にその断片が見える。これらの抄物は、義堂が重視していた書物であると同時に、文学観を色濃く表しているものであるため、今後整理することが重要となる。

目的 の義堂の『空華集』を訳注することについては、の作業を進めながら行う必要があったため、困難を極めた。これまで中世禅林の中ではその人物像が比較的明らかにされていた義堂であるが、対人関係や作詩背景については不明な点が多く、『空華日用工夫略集』に頼るだけではいけないことが分かった。同時期の他の禅僧の動向も確かめる必要があることが分かった。また詩題から一般的詩文集に近いと考えられていたが、義堂の詩が偈頌的要素を多分に含んでいることが分かった。語句の出典を探ると、『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』を始めとする内典に行き着くことが多く、『碧巖録』や『無門関』といった書物を重視していたことが分かった。これまでの研究が表面的であったことが証され、今後訳注作業を継続することで、義堂の文学観を究明しなければいけないことを実感した。なるべく同時代の禅僧が行った解釈で訳することを心がけるため、出典の分かる語句については、その出典に抄物が存在する場合は適宜利用した。まだ僅か数首に過ぎないが、詳細な訳注稿ができたと考えている。継続的に公表していきたい。

研究分担者の朝倉和氏は、本研究費採用期間中に、清文堂より『絶海中津研究 人と作品とその周辺』を上梓した。本書の第二章「和韻から見た絶海中津と義堂周信」・第三章「五山文学における「和韻」について 絶海中津と義堂周信を中心に」において、義堂と絶海の和韻について論じている。また『広島商船高等専門学校紀要』（40号・2019）において、『花上集』に収められる義堂周信の詩十一首について、その抄物を利用して、訳注を公表した。義堂の詩は後世においても高く評価され、その詩が選集に収められている。しかもその詩に対して禅僧が解釈しており、抄物を通じて行った訳注は、今後の『空華集』訳注作業に有益な示唆を与えるものと言える。

研究分担者の朝倉尚氏は、本研究費採用期間中に、清文堂より『禅林の文学 戦乱における禅林の文芸』を上梓した。本書における連句関連の論考は応仁の乱期が中心であるが、その発端は義堂に存する。氏も禅林の文芸の基礎を築いた人物として義堂と認識している。本研究においては、義堂の著書に関して多大な助言を得ることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 太田亨	4. 巻 65
2. 論文標題 日本中世禅林における杜詩受容 杜詩の援用について（中期の場合）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 愛媛大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 305-320
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 太田亨	4. 巻 18
2. 論文標題 日本中世禅林文学における茶に関わる典故表現について	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 白居易研究年報	6. 最初と最後の頁 195-228
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 太田亨	4. 巻 64
2. 論文標題 日本中世禅林における杜詩受容 杜甫と自然の関係に着目して（中期の場合）	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 愛媛大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 351-362
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 朝倉和	4. 巻 40
2. 論文標題 『花上集』抄訳稿 鄂隠慧カツ詩	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 広島商船高等専門学校紀要	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 太田亨	4. 巻 66
2. 論文標題 『空華集』訳注 七言絶句部(一)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 愛媛大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 165-173
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 朝倉和	4. 巻 41
2. 論文標題 『花上集』抄訳稿 西胤俊承詩	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 広島商船高等専門学校紀要	6. 最初と最後の頁 123-132
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 朝倉和	4. 巻 42
2. 論文標題 『花上集』抄訳稿 義堂周信詩	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 広島商船高等専門学校紀要	6. 最初と最後の頁 144-156
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 太田亨
2. 発表標題 日本中世禅林における中国文学受容について 応永年間を中心に
3. 学会等名 応永・永享期文化論研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 太田亨	4. 発行年 2019年
2. 出版社 白帝社	5. 総ページ数 352頁(303-325)
3. 書名 佐藤利行教授還暦記念日中比較文化論集	

1. 著者名 朝倉和	4. 発行年 2019年
2. 出版社 清文堂	5. 総ページ数 812頁
3. 書名 絶海中津研究 人と作品とその周辺	

1. 著者名 朝倉尚	4. 発行年 2020年
2. 出版社 清文堂	5. 総ページ数 740
3. 書名 戦乱をめぐる禅林の文芸 戦乱をめぐる禅林の文芸	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	朝倉 和 (ASAKURA HITOSHI) (00390493)	広島商船高等専門学校・その他部局等・教授 (55402)	

